岡豪風土

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第67号 2009年3月20日

資料見聞

仁井田五人衆の兜

高岡郡窪川町（現四万十町）に鎮座する高岡神社には、戦国時代にこの地域を支配していた「仁井田五人衆」が奉納したという兜が伝来しています。県内には、この時期の国人や地侍の遺品はほとんど現存しておらず、大変貴重な資料といえます。

五つの兜のうち三つは「古頭形兜」、残りの二つは「筋兜」と呼ばれる系統の兜です。なかでも最も目を引くのが、鉢のサイズが一番大きい写真下の兜でしょう。この兜には「土州住人北原宣保作」という銘があり、製作した職人の名も確認できます。

五人衆のうちの誰がこの兜を発注し、合戦に用いていたのかは残念ながら分かりません。しかし、現存する同社の棟札等によれば、五人衆とは「東氏（本在家城主）・西氏（影山城主）・西原氏（中江城主）・窪川氏（茂串城主）・志和氏（志和城主）」を指しますので、このうちの誰かが奉納したものということになります。

彼等はいずれも長宗我部元親の土佐平定戦の最中、元亀二年（一五七一）頃に降伏。以後は、同氏の家臣団の一翼をになって数多の合戦に従軍しました。

これらの兜を見ていると、元親の軍門に降ってもなお、凛とした武将の心意気を失わなかった五人衆の姿が甦ってくるような気がします。（野本）

伝仁井田五人衆所用兜　高岡神社蔵

黒漆塗古頭形兜　高岡神社蔵

分厚い鉄板を使用した初期の頭形兜。土佐で作られたものと思われ、眉庇上の打眉などに強烈な個性が感じられる。大鍬形の前立は後世のもの。

特別展

「兜 ―もののふの美意識―」によせて

平成21年4月24日（金）～平成21年6月21日（日）

学芸専門員　野本　亮

武装した武士をイメージする時、真っ先に頭に浮かぶものは何かと問われれば、大抵の人は「兜」と答えるのではないでしょうか。

現在でも男の子の節句には兜を買ってお祝いする風習が残っていますが、古より、兜は「もののふ（武士）」の分身であり、シンボルであり、特別な武具でした。

兜の天辺の穴に据える飾り金物を八幡座といいますが、別名神宿ともいいます。これは「穴から神様が入ってきてその兜をかぶる者を守護してくれる」という思想の現れであり、兜を神聖視していたことの証拠でもあります。裏を返せば、その最も神聖なモノを奪うことは敵のすべてを奪うことにもなったという訳です。

戦さ場で、武運つたなく首級をあげられた時、自ずから兜も敵の手に落ちるのですから、兜と武士は一心同体だったともいえるでしょう。

◆兜展の概要

今回の特別展では、三階の総合展示室を使い、日本甲冑武具研究保存会広島県支部の方々からお借りした兜約八〇点を一堂に展示します。時代的に貴重なもの、意匠が斬新で個性的なものを選りすぐっていただきましたので見応え十分です。

また、一階の企画展示室を地域展示とし、長宗我部氏や山内氏とその家臣ゆかりの兜約二〇点も併せて展示します。三階で兜の変遷をご観覧いただいた後は、地元伝来の資料をじっくりご堪能ください。

当館では、これまで何度か甲冑を展示したことはありますが、兜だけにこだわり、鎌倉から江戸期の優品を一〇〇点も集めた展示会は過去に例がありません。

名実ともに名兜の「一〇〇頭展」となるでしょう。

星兜に大鎧・大袖で武装した武士の一団。主人に大切な兜を差し出す従者の姿が印象的。『平治物語絵詞』東京国立博物館蔵

◆兜の構造

兜は、面頬や胴、佩楯や籠手、臑当といった甲冑を構成する部分防具の一つですが、先にも述べたように、独立した防具として特に重要視され、念入りに作られました。

構造的には、頭部を守る鉢と、頸部を守る鞠から成っていて、鎌倉・南北朝期の比較的古い時代のものは、鉢のみで鞠が失われているものもあります。

鉢や鞠の材質は、主に鉄や皮が多く用いられました。また、兜鉢の内側には、「浮張」と呼ばれる細工があり、革や布張りによって、鉢と頭の間に一定の空間を設けました。これは戦闘時において兜が受ける衝撃から頭を守るためのものでした。

浮張を除くと、甲冑師の生国や氏名、製作年代を刻んだ銘が確認できることもあります。

◆兜の種類　平安～室町期頃

兜は時代とともにその姿を変えていきますが、大別すると、星兜・筋兜・変わり兜の三種に分けられます。

鉄黒漆塗二十四間四方白星兜鉢　鎌倉時代

鉄黒漆塗二十八間四方白星兜鉢　鎌倉時代

古墳時代からあった衝角付兜をベースに、平安時代に登場した大鎧に合うように作られたのが「星兜」です。

騎射戦中心であった当時の戦では、弓矢の脅威は侮り難かったため、数枚～数十枚の縦長の鉄板を半球状に重ね、その板と板を尖った鋲で留める方法で、極めて頑丈に作られました。このびっしりと並んだ鋲を星に見立て、星兜、または厳星兜と呼称されるようになったのです。

鎌倉～南北朝期にかけて、戦は次第に騎馬戦から徒歩戦に移行します。

当然、防御もさることながら、機動性が重視されるようになりました。兜の鋲は、本来の接合の役目だけを残して省略され、板金の片側の縁を直角に捻り返して筋を幾重にも立てた「筋兜」が現れます。

鉄錆地十六間総覆輪筋兜鉢　室町時代

この兜は、厳星兜から進化した「小星兜」より、太刀打戦に向いており、多くの武士に好まれました。南北朝～室町期にかけては、洗練され、軽量化が図られたこの兜が主流を占めるようになります。

また、室町期には、この時代に南方から輸入された瓜を象った阿古陀形という装飾性の高い筋兜や、経費が安く製作が容易な頭形兜も作られました。

「古頭形」ともいうこの様式の兜は、被る人間の頭を象った形状をなしたもので、各地で作られた形跡があります。高知県の高岡神社に奉納されている伝仁井田五人衆所用の兜三点も、この古頭形兜です。

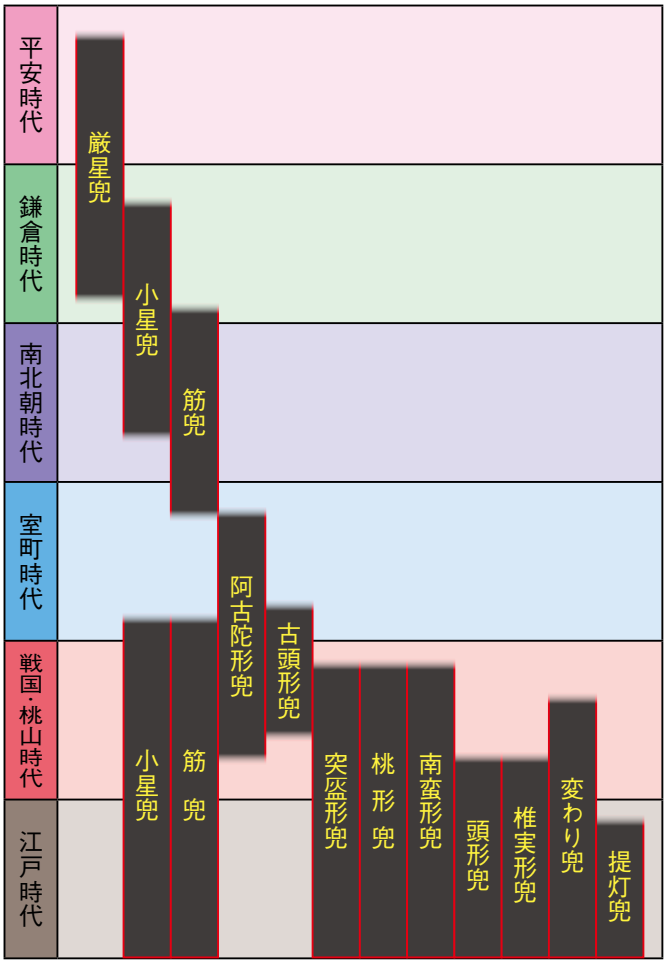
◆兜の種類　室町末期～桃山期

応仁の乱以降の大規模な集団戦と、鉄砲の伝来は、戦法や築城法に変化をもたらすと同時に、甲冑そのものにも重大な影響を与えました。

長槍や鉄砲の弾丸から頭部を守るためには、より一層強度を増した兜が必要で、一時期姿を消していた筋兜や小星兜が再登場します。

また、被弾の衝撃を少しでも回避するため、全体を尖らせた、「桃形」・「椎実形」・「突盛形」といった兜も登場しました。

土佐一宮（土佐神社）に奉納され、現在、当館が管理している長宗我部元親所用（伝初陣時着用）と伝える十二間突盛形兜もこの時期のものです。



※伊澤昭二氏作成図参考

鉄黒漆塗十二間突盛形兜
伝長宗我部元親所用　土佐神社蔵

鉄錆地九枚張筋兜　戦国時代

鉄黒漆塗六十四間筋兜
（春田勝定作）　戦国時代

今は鉄錆地に見えますが、本来は黒漆がかかっており、湾曲した天草眉庇が実に個性的です。

また、「雑賀兜」や「南蛮兜」も、鉄砲全盛の時代に好まれた兜です。雑賀兜は、一般的に紀伊国雑賀（現和歌山市）の甲冑師が得意としたものといわれ、よく鍛えた鉄板を接合し、地金のままの仕上げとなっているのが特徴です。

南蛮兜は文字どおり西洋から輸入された鉢（キャパセット）に和風の鞠などを取り付けたもので、徳川家康をはじめ、多くの戦国・織豊期の武将たちに愛用されました。

両方とも、どことなく異国の匂いが漂う外観が魅力的です。今回の特別展でもユニークな形をした雑賀兜が展示されますので注目してみてください。

鉄錆地七枚張雑賀兜　桃山時代

◆兜の種類　桃山～江戸期

この時期の特徴としては、戦国期以来作られてきた兜に加え、「変わり兜」と称される斬新な意匠を持つ兜が大流行したことでしょう。

鉄漆塗冥官形兜

板屋貝形兜

鉄肉色塗人道頭形兜

変わり兜は、桃形や突盔形鉢の上に鉄板・革・和紙などで作り出した造形物を載せた、いわゆる張懸兜などを指し、形象兜とも呼ばれます。

関ヶ原合戦や、大坂の陣をテーマにした屏風絵には、必ずといってよいほど、この種の兜を被った武将が描かれています。

鉄錆地三十六間覆輪兜

老頭形兜

数十万規模で行われる合戦場において、自身の姿を目立たせることは容易ではなく、動きの制約を覚悟のうえで、各武将とも斬新さを追求していったのでしょう。

もちろん、すべての変わり兜が実戦で使用された訳ではなく、特定の武家の象徴として、また、祭礼具や信仰対象として作られたものもありますので区別する必要があります。

張懸の例としては、縁起物や日常の生活道具、強さを象徴する動物や昆虫など、枚挙に暇がありません。

また、兜に装着する立物（前立・後立・脇立・頭立）を巨大なもの、奇抜なものにすることで、圧倒的な雰囲気を醸し出しているものもあります。

大河ドラマ「天地人」でお馴染みの直江兼続の兜※の前立は「愛」の一文字。実にインパクトがあります。

また、高知市の雪蹊寺には、長宗我部元親の嫡男・信親所用と伝える具足がありますが、この具足に付随する兜にも、金龍頭の前立、鹿角の脇立、御幣の後立が付いていて、この時代の流行が反映されています。

軍配（丹波亀山松平家伝来）

本展では、兜以外にも、揃いの具足や、軍配・陣羽織などの武具も展示して、機能と造形の美にこだわった武将たちの美意識に迫ります。

兜とその時代的な背景を深くお知りになりたい方のために、京都国立博物館工芸室長・久保智康氏による講演会「中世日本の武装」（五月九日）と、日本甲冑武具研究保存会広島県支部長・出崎智晴氏による展示解説「兜の名品を見る」（四月二四日・六月二一日）が行われます。ふるってご参加ください。

※今回の展示品ではありません。

れきみんトピックス

「休・廃校活性化プロジェクトｉｎ布」に歴民参加

「休・廃校活性化プロジェクト」とは、平成一九年度より始まった文化庁芸術拠点形成事業の一つで、高知県立美術館が主催となって行なっているものです。高知県は、過疎化の影響で少子化や地域の高齢化が進んでいます。それに伴い小・中学校の休・廃校化も進んでいます。この事業は、休校や廃校となった校舎を利用し、「遠隔地でアートやイベントなどを開催、地域活性化を図ろう」という目的で実施しているものです。つまり、アートやミュージアムの知恵を地域でも生かそうと取り組んでいるのです。

この事業が二年目となる本年度は一〇月一八日～一九日の二日間「休・廃校活性化プロジェクト・ｉｎ布２００８」を土佐清水市布地区（休校中の布中学校）で開催しました。今年は、（財）高知県文化財団が運営している文化施設（高知県立美術館・高知県立歴史民俗資料館・高知県立文学館・高知県立坂本龍馬記念館・高知県立埋蔵文化財センター）が参加、ミュージアム事業の一部を布地区で開催することができました。年数回の打ち合わせを経て、前日は中学校や地域の草刈りや大掃除から始めました。当日は布の方々が植えたコスモスが、人々を迎えてくれました。また、道筋に立てられた沢山の大漁旗が風に大きくなびき、人々の期待が高いことを示していました。当館は、地元の文化や歴史に関心をもっていただこうと「よろい・かぶとを身につけて城主になってみよう」を開催、戦国武者気分を楽しんでいただきました。一日中子ども達の歓声が校庭に響き渡りました。その後、この事業が縁となり、平成二一年一月一七日には、休校となる布小学校で最後の思い出にと青空学級にも参加することができ、地域に少しずつ事業が根付いていることを感じました。（岡本・寺川）

青空学級にて

歴民館のパティオ（８）
フリースペースの尖底土器

館長　宅間一之

今年一月と二月、一階のフリースペースに「尖底土器」が並んだ。「刈谷我野遺跡出土の尖底土器復原展」である。陶芸家武吉廣和さんが、発掘現場で出会った内外両面施文の土器片の、「八〇〇〇年前とは信じられないデザインの精巧さ」に陶芸家として衝撃を受け、この謎を解明しようと考えたのが始まりという。

一月の展示は須崎市立横浪小学校六年生一五人の「縄文土器づくり展」であった。総合体験学習として武吉廣和さんの指導で、土器づくりから縄文料理、そして試食までの体験成果の報告であった。

二月は武吉廣和さんの、「内外両面に施された押型文の謎は解けるのか」とする尖底土器の「完全復原」展である。

胎土は南国市田村遺跡群や縄文遺跡が所在する四万十町六反地周辺の粘土を使用し、野焼き焼成、色の表現までも配慮しての製作である。難解な報告書を解読し、文様も詳細かつ完全に読みとっての「完全復原」を試みている。刻まれた文様は、現代のカッターや彫刻刀ではどうしようもない「石の文明の謎」と位置づけた。「なぜにかくまで難易度の高い原体ばかりつくるのか」とつぶやきながらも、土器に「芸術的バーコード」の機能を感じたという。

この思いと感動は横浪小学校での体験学習に生かされていた。こうした取り組みが「こどもたちの楽しい授業として結実」し、さらなる「教育の発展につながる」と武吉さんは語り続ける。

フリースペースは新春の光に満ちていた。

考古

岡豊山の遺跡
②岡豊山古墳の発見

前号の『岡豊風日』第六六号で岡豊城跡から祝部土器（須恵器）が発見されたことについて、昭和九年（一九三四）一〇月二五日の『高知新聞・土陽新聞』の記事を紹介しました。この記事の約一ヶ月後の同年の一一月一五日の『高知新聞』には「岡豊城阯から古刀發掘　一千年以上のもの」と題し、以下のように書かれています。「岡豊村西田良氏所有の長宗我部城阯は、既報の通り一大遊園地に公開のため、記念碑建設基礎工事中、三ノ丸地下より彌生式土器を發掘し、考古學上に資する處が多かつたが、今回更に古刀數口が發見されたが、何れも一千年以上のものばかりなので、西田氏はこの一大史庫を如何にすべきかについて、目下考慮しつつある。」（「新聞雑見」『土佐史談』第四九号　昭和九年一二月一日刊より）。

この記事で発見された土器が、「祝部土器」から「彌生式土器」に変わっていることは不思議です。新聞記者の思い違いとも考えられます。そして古墳から鉄製品が出土していたことが記事よりわかります。記念碑の写真を紹介しておきます。（岡本）

歴史

土佐電氣鐵道の路面電車

当館の企画展「絵葉書のなかの土佐―移ろいゆく時代の記憶―（平成二〇年九月二六日～一一月二四日開催）」に展示された絵葉書の中に昭和初期の播磨屋町交差点の絵葉書がありました。この絵葉書には「（高知）往来頻繁を極むる播磨屋町交叉点」と印刷され、中央には土佐電氣鐵道株式會社の電車が写っています。ところで、高知に路面電車が走り出したのは、いつ頃からなのでしょうか。絵葉書をみてそんな疑問を持った来館者の方もいたのではないでしょうか。日本で初めて道路に軌道を設置して、乗客を運んだのは、明治一五年（一八八二）のことで、実は二頭の馬が引く馬車鉄道でした。当然通過後には残るものがあり、苦情も出たそうです。国内で初めて電車が走ったのは、東京の上野公園で開催した第三回内国勧業博覧会の会場でした。その後、明治二八年に京都で最初の路面電車の営業が始まりました。高知では、明治三七年五月二日に、本町線の乗出～堀詰間、潮江線の梅ノ辻～桟橋（桟橋五丁目）間の単線が開通しました。当然発電という大きな事業も同時に展開されていたのです。

三階総合展示室（近・現代）コーナーには、大正末期の高知市堀詰の様子を復原した模型があり、路面電車も走っています。（寺川）

高知市堀詰（模型）　大正時代

民俗

旧味元家住宅にお正月が来ました

一一月にカヤの葺き替えを行ない、生まれ変わった民家（旧味元家）。はじめてのお正月には、味元家のあった津野町高野の門松を立てたい、というのが学芸員の願いでした。でも、松などの材料を手に入れるのは難しそうです。困ったあげくに以前おたずねしたことのある地元・高野の中越文夫さんにお電話をしました。すると材料から全部準備して飾りに来て頂けるとの嬉しいお返事。一二月三〇日、同じ高野の熊田光男さんと味元家の主人・彰一さんといっしょに岡豊山へかけつけて頂きました。そして、門松（お正月様）はもちろんのこと、床の間の注連飾りや、ホウライさん、トシトコ、ヒブセキ様、若水汲みの松明まで飾って頂きました。旧味元家住宅には誰も住んでいませんが、本当にお正月が来たようです。一月には高野の味元家を何度もたずね、山の口開け、畑の鍬初め、七草、田の鍬初め、かなみこ様、送り正月を取材させて頂きました。調査を活かして民家で再現できたらと考えています。（梅野）

お正月様のカシの木とシイの木を民家の庭に立てて頂きました

床の間もお正月らしくなりました（08.12.30）

れきみんニュース

若武者・もとちか君登場

歴民館に新しい仲間としてマスコット・キャラクター「若武者・もとちか君」が登場しました。昨年大好評をいただいた「初陣・もとちか君」のキャラクター人形をベースに、少し成長して大きくなった長宗我部元親をキャラクターデザイン化しました。初陣を果たし、これから土佐統一そして四国制覇への野望を秘めて飛翔する元親を、子どもたちにも親しんでいただけるように可愛らしく、今風「ゆるキャラ」で製作しました。

これからいろいろなところで、皆様にお目にかかると思いますが、可愛がって下さい。なお、新しい「若武者・もとちか君」の人形も現在製作中で桜の時期には販売出来ると思いますので、ご期待ください。

（猪野）

岡豊山フォトコンテストのご案内

今年も桜の時期となり、岡豊山恒例の「岡豊山フォトコンテスト」が始まります。

応募期間は三月二九日から四月一八日までです。応募用紙や詳細については当館までお問い合わせ下さい。

なお、桜の季節に会わせた写真展「前田博史写真博・さくらはくら２００９」も三月二〇日（金・祝）から四月一二日（日）にかけて当館企画展示室にて開催いたしますので、岡豊山の桜と前田先生の自然写真の両方でお楽しみ下さい。

（猪野）

旧味元家の茅（かや）屋根が葺き替えられました

多くの方が参加した茅葺き体験。職人さんに教わりながら茅屋根を葺くという貴重な体験ができました。
（写真は上下とも水田豊さんの撮影）

旧味元家住宅主屋の茅屋根は傷みが激しくなっていたため、昨年一一月に葺き替えが行なわれました。平成二年に東津野村（現津野町）から移築した時には県外の方法で葺かれましたが、今回は東津野村のお隣、梼原町の職人さんに地元の方法で葺いていただきました。使われた約千五百束の茅も地元のものが中心でした。

かつて茅屋根の葺き替えは、村人の共同作業でした。葺き替えは二〇、三〇年に一度は必要で、村の規模にもよりますが、村で毎年一軒くらい葺き替え普請（ふしん）があったそうです。

今回は、親方、川上義範さんを中心に職人さんとボランティア延べ約三〇〇人が二四日間で茅屋根を葺き替えました。

ボランティアは毎日参加する方や仕事の合間にかけつける方、泊まり込みの大阪の方、撮影チームなどさまざまでしたが、みなさん大活躍でした。また、茅葺き体験の日には小さなお子さんの参加もありました。

多くの方々の手で生まれ変わった味元家には、いろりの火を囲んで昔のくらしを学習する小学生の団体や俳句をひねる方などが連日訪れています。みなさんもご来館の折には、ぜひお立ち寄りください。春には岡豊山の桜が茅葺き屋根に映えて美しいことでしょう。

（中村）

完成間近の茅屋根。職人さんとボランティアがハサミで表面を刈り込んでいます。茅屋根の化粧なのだそうです。

新・れきみんサークル 会員募集のお知らせ

会費：年会費2,000円
会員期間：会員証発行日より１年間
特典
- ◆当館自主企画の企画展･講演会へのフリーパス
- ◆65才以上の会員の方には入会時に当館招待券を２枚進呈
- ◆同伴者２名の入館料割引
- ◆会員限定イベントの開催　但し、費用はバスなど実費負担になります
- ◆歴民館広報誌「岡豊風日」「年報」の送付や各種イベントのお知らせ
- ◆提携ショップやミュージアムショップでの割引や、当館発行の図録の割引
- ◆岡豊山歴史公園内の民家の無料利用（但し、営利活動を除く）

下記の郵便局口座に振込用紙通信欄へ必要事項※をご記入いただきお振り込みいただくか、当館受付にて入会申込書にてご入会下さい。

記　０１６９０－８－５８３２１
口座名義人：高知県立歴史民俗資料館
れきみんサークル
※氏名・住所・電話番号・年齢

研究紀要・収蔵資料目録近日刊行

『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第17号
『収蔵資料目録第14集 寺石正路関係資料目録Ⅲ 考古分野　古鏡・拓本編』
頒布価格未定

臨時休館のお知らせ
平成21年4月19日～23日／6月22日～7月7日
特別展の資料搬入･搬出と収蔵庫燻蒸のため休館します。

岡豊風日（おこうふうじつ）第67号
平成二一年三月二〇日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡１０９９－１
ＴＥＬ　０８８（８６２）２２１１
ＦＡＸ　０８８（８６２）２１１０
開館時間　午前９時～午後５時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料　通常期（常設展）大人（18才以上）450円・団体（20人以上）360円
（企画展）常設展示込500円・団体（20人以上）400円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（一名）
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成21年4月～6月の催し

特別展「兜－もののふの美意識－」

平成21年4月24日（金）～6月21日（日）

兜の名品約100点を展示し、兜の時代的な変遷や、その背景にある「もののふ」たちの美意識に迫ります。

資料の大半は、日本甲冑武具研究保存会広島県支部の方達のコレクションで、県内ではめったに見られない名品揃いです。

また、今回の特別展では、地域展示として、長宗我部氏とその家臣団の兜も展示します。

高知県では過去に例のない「名兜100頭展」です。

講　演　会　要予約　観覧料要

5月9日（土）14:00～16:00　先着100名
「中世日本の武装」　講師：久保智康氏（京都国立博物館工芸室長）

展示室トーク　申込不要　観覧料要

4月24日（金）11:00～12:00
6月21日（日）13:00～14:00
「兜の名品を見る」　講師：出崎智晴氏
（日本甲冑武具研究保存会広島県支部長）

5月4日（祝・月）13:00～14:00
「長宗我部氏と家臣の兜を見る」　講師：当館学芸員

れきみんの日　終日観覧料無料

5月3日（祝・日）
クイズ大会（終日）
ワクワクワーク「長宗我部氏の武将になろう！」
「折り紙でかっこいい兜を作ろう！」
10:00～12:00　13:30～15:30　２回実施　自由参加
「土佐民話の家㉑」13:30～14:30　お話：市原麟一郎氏

黒塗鉄綴頭形兜（七ツカタバミ紋付）

ワクワクワーク

5月5日（祝・火）10:00～12:00　13:30～15:30
「長宗我部氏の武将になろう！」　２回実施　自由参加

高知の食文化を味わう～食のこころ～

毎月第三土曜日　11:00～13:00
申込要　参加費2,500円程度
前月10日に申込受付開始。詳細はお問い合わせ下さい

次回企画展の予告

企画展「復元！からくりの世界」（仮）
2009年8月1日（土）～8月31日（月）

南国市出身の細川半蔵の技術を受け継いで復元されたからくり人形の数々を展示します。また、期間中はからくり人形を実際に動かして実演をご覧いただく機会も設けます。